

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16679

研究課題名(和文) 平安・鎌倉期の大嘗祭芸能と宮廷の御神楽の基礎的研究

研究課題名(英文) A Study on the Performance of Daijosai and Mikagura of the Imperial Court during the Heian and Kamakura Periods

研究代表者

中本 真人 (NAKAMOTO, Masato)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：30734678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：平安期から鎌倉期にかけて行われた大嘗祭および宮廷の御神楽について、基礎的な研究を行った。具体的には、大嘗会和歌における「かみあそびのうた」や「神楽歌」の性格を明らかにするとともに、それらの和歌がどのように曲を付されて、儀礼の場においてどのように奏されたのかについても検討した。さらに、宮廷の御神楽の基礎的研究を進展させただけでなく、単著『宮廷の御神楽 王朝びとの芸能』（新典社新書、2016年）の刊行によって、これまでの研究成果を一般向けにわかりやすく発信した。

研究成果の概要(英文)：I presented a study on Daijosai and mikagura of the Imperial Court from the Heian period to the Kamakura period. Specifically, this study elucidated the features of the “kamasobi no uta” of waka poetry of Daijoe, as well as “kagura uta.” It also examined ways in which those waka poems were set to music and performed at a ritual. With the goal of advancing the study on mikagura of the Imperial Court, I have also made my research results accessible to the general public by publishing a book titled *Kyutei no mikagura: ocho bito no geino* (Tokyo: Shintensha Shinsho, 2016).

研究分野：日本文学

キーワード：日本芸能史 日本歌謡史 宮廷の御神楽 大嘗祭 大嘗会和歌 楽所 神楽歌 芸能論

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 応募者は、中本真人『宮廷御神楽芸能史』(新典社、2013)において、宮廷の御神楽に関する基礎的研究を行った結果、大嘗祭との関係においても、同様の基礎的研究を行う必要を強く感じるようになった。

(2) 大嘗祭は、日本の儀礼・芸能研究の中心的課題でありながら、基礎的研究の不十分な対象であった。今後も大嘗祭の基礎的研究が進展しなければ、文学研究・芸能研究・歴史学研究・民俗学研究などの研究成果を発展的に活用したり、各分野の成果を統合させたりすることも困難な状況が続くだろう。それぞれに進められてきた研究の成果を、総合的に活用して基礎的研究を展開させていくことが、当該分野における喫緊の課題であった。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究では、平安・鎌倉期の大嘗祭の儀礼に注目し、文献史料に基づく基礎的研究により、同時期の儀礼環境・文学作品・官人組織などと関連させつつ、その芸能の様相を具体的に明らかにする。

(2) 本研究の成果により、宮廷の御神楽と大嘗祭芸能の具体的な関係が提示されるだけでなく、これまで諸分野で行われてきた大嘗祭研究が発展的に統合されることも期待できる。

### 3. 研究の方法

(1) 大嘗祭研究の先行研究を収集、精査し、当該研究分野の到達点を確認する。さらに平安・鎌倉期を中心とする大嘗祭の芸能の基本的な文献史料を収集し、大嘗祭の芸能に関わる記事を整理、分析する。

(2) 大嘗祭の芸能の文献史料の調査結果に基づき、特に大嘗祭の芸能の担い手(楽人)の動向を具体的に把握する。また大嘗祭和歌の作者(詠み手)と楽人(歌い手)の位置を確認し、彼らの具体的な活動の実態を明らかにする。

(3) 大嘗祭の芸能に関わる研究成果に基づき、特に9世紀半ば以降の宮廷の御神楽の成立、形成について具体的な見通しを示す。さらに視覚的に把握することの難しい文献史料の記事を正確に理解するために、伝統芸能・民俗芸能のフィールドワークを実施する。

### 4. 研究成果

(1) 平成27年度は、研究計画に従って研究を進めると同時に、雑誌論文および口頭発表の両方に渡って研究成果を公表することができた。以下、当該年度発表の雑誌論文に基づきつつ、研究実績の概要をまとめる。

最初に「音楽説話の多氏 御神楽の拍子の家の形成をめぐる」(説話文学会『説話

文学研究』50号、平成27年10月)では、院政期以降、御神楽の拍子の家として活動した多氏について、文献史料に基づいて、その活動の実態を明らかにした。この研究により、多氏は、11世紀後半に出た多節より、神楽歌の拍子の家としての地位を固めたことが判明した。また院政期から中世にかけて宮廷儀礼に関わった楽家の成立過程の一端も解明することができた。

次に「大嘗会和歌の神楽歌と清暑堂御神楽の変容」(慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第109号第1分冊、平成27年12月)では、大嘗会和歌の中でも、特に実際の機能が不明であった神楽歌について検討した。大嘗会風俗歌十首は、辰・巳日の儀に奏楽される八首が、楽を新作する楽所に下されたのに対して、稲舂歌・神楽歌は楽が新作されなかったとみられることが明らかになった。

3つ目に「院政期の大嘗会と楽所 風俗歌舞の制作と奏楽をめぐる」(日本歌謡学会『日本歌謡研究』55号、平成27年12月)では、院政期の大嘗会の芸能の具体的な姿を確認するとともに、同時期の芸能環境についても整理した。特に天仁元年の大嘗会に注目し、大嘗会の楽所では楽行事を中心としつつ、悠紀方・主基方の風俗歌舞の教習が行われ当日奏されたことを明らかにした。

(2) 平成28年度の主な業績として、単著の『新典社新書68 宮廷の御神楽 王朝びとの芸能』(新典社、平成28年)をあげることができる。本研究課題でもある宮廷の御神楽については、研究者による論集があるものの、一般書がなかった分野の1つである。同書は、宮廷の御神楽の入門書として執筆されたが、日本芸能史・日本音楽史の入門書としても読むことのできる内容となっている。本研究課題の成果は、広く一般書として刊行される計画であったが、同書の刊行によりその目的を達することができた。今後は、一般の読者だけでなく、大学の講義や一般向けの講座のテキストとして利用される見通しである。

さらに、現在一般向けの共著として『古典文学の常識を疑う』(勉誠出版、平成29年5月刊行予定)が進められており、その1項目として「中世歌謡は信仰とどのように結びついていたか」を執筆した。こちらも本研究課題に密接に関係するテーマであり、研究成果を学界だけでなく、広く一般の読者に向けて問う内容となっている。

また「上代文学会研究叢書」の1冊として、藤原茂樹編『上代文学と芸能(仮題)』(笠間書院、平成30年刊行予定)が企画されており、拙稿「神楽に先行する芸能」も執収録される(現在印刷中)。この論考では『貞観儀式』における園韓神祭の「神楽」の記述に注目し、「神楽」が下級の奉仕者の饗宴であった事実を確認した。さらに、その後、競馬負方献物の「神楽」や、賀茂臨時祭の還立の御

神楽に展開していく経過も整理している。

(3) 平成 29 年度の主な研究実績としては、まず「持明院統の院と新宮御神楽」(新潟大学人文学部『人文科学研究』第 141 輯、平成 29 年 1 月)および「後醍醐天皇と内侍所御神楽」(日本歌謡学会『日本歌謡研究』第 57 号、平成 29 年 12 月)をあげることができる。本研究課題の宮廷の御神楽をめぐることは、研究代表者を含めて、これまで平安期を主たる研究対象としてきたが、今回の 2 つの論考では鎌倉後期から南北朝期という時期を扱っている。本年度は本研究課題の最終年度であったが、これまでの成果を踏まえつつ、さらに対象とする時代を広げることができた。今後は、南北朝期から室町期における内侍所御神楽も研究対象に収めつつ、新たな視点で研究を進展させる予定である。

さらに、一般向けの共著として『古典文学の常識を疑う』(勉誠出版、平成 29 年 5 月)が出版され、その 1 項目として執筆した「中世歌謡は信仰とどのように結びついていたか」も発表された。内容は一般向けだが、本研究課題に密接に関係するテーマであり、国文学分野だけでなく、他分野の研究者も読者に想定した内容となっている。

また「第 3 回上代文学会夏季セミナー(平成 29 年 8 月 23 日、早稲田大学)では「上代の芸能と楽書」と題した報告を行っている。中世の代表的な楽書である『教訓抄』から伎楽」の項目を取り上げ、これまで『日本思想大系』などの活字本に拠って研究が進められてきたために、写本に含まれる多くの情報が見落とされた事実を明らかにした。その上で、宮内庁書陵部図書寮蔵本の「伎楽」の項目を丁寧に読み解き、従来の研究にはない知見をいくつも提示することができた。

なお本報告は、上代文学会夏季セミナーブックレット『芸能と歌謡 上代の芸能研究の方法と方向』(笠間書院、平成 30 年度刊行予定)にて「上代の芸能研究における楽書

宮内庁書陵部蔵『教訓抄』の伎楽」として公刊される予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

中本 真人、順徳天皇と宮廷芸能、佐渡学セミナー記録集、査読無、No.6、pp.27-44、2018

中本 真人、後醍醐天皇と内侍所御神楽、日本歌謡研究、査読有、Vol.57、pp.35-44、2017

中本 真人、持明院統の院と新宮御神楽、人文科学研究、査読無、No.141、pp.T1-T16、2017

中本 真人、中世歌謡と信仰はどのように

結びついていたか、古典文学の常識を疑う、査読無、pp.122-125、2017

中本 真人、院政期の大嘗会と楽所 風俗歌舞の制作と奏楽をめぐる、日本歌謡研究、査読有、No.55、pp.41-51、2015

中本 真人、大嘗会和歌の神楽歌と清暑堂御神楽の変容、藝文研究、査読有、Vol.109 No.1、pp.96-112、2015

中本 真人、内侍所御神楽と堀河天皇、明治聖徳記念学会紀要、査読無、Vol.52、pp.450-466、2015

中本 真人、音楽説話の多氏 御神楽の拍子の家の形成をめぐる、説話文学研究、査読有、No.50、pp.128-138、2015

〔学会発表〕(計 5 件)

中本 真人、上代の芸能と楽書、第 3 回上代文学会夏季セミナー、中本 真人、2017

中本 真人、後醍醐天皇と内侍所御神楽、平成 29 年度日本歌謡学会春季大会、2017

中本 真人、順徳天皇と宮廷芸能、第 6 回佐渡学セミナー、2017

中本 真人、院政期の熊野御幸と儀礼・芸能、紀州地域学共同研究会 研究集会 2015 夏、2015

中本 真人、院政期の大嘗会と楽所 風俗歌舞の制作と奏楽をめぐる、平成 27 年度日本歌謡学会春季大会、2015

〔図書〕(計 1 件)

中本 真人、新典社、宮廷の御神楽 王朝びとの芸能、2016、全 160 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6．研究組織

##### (1)研究代表者

中本 真人 (NAKAMOTO, Masato)  
新潟大学・人文社会科学系・准教授  
研究者番号：30734678

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし

(4)研究協力者：なし